

救命の心

相 田 真 理

秋が深まるこの季節を迎える度に、高校時代に逝った友人のことを思い出します。

友人は陸上部の長距離選手で、レース中に突然倒れ2週間後に息を引き取りました。心臓突然死だったと後で知らされました。当時、その場に居合わせた人は救急車を呼ぶ以外に何もできない時代でした。高校生だった私も何もできず情けなく悲しい思いをしました。そのことをきっかけに医療について学びたいという志が与えられ、現在中学部で養護教諭として生徒たちの健康に関わる仕事をさせていただいています。

2004年7月に突然の心停止を救命するためには早期の除細動が必要とのことで、AED（自動体外式除細動器）が医療従事者以外にも使用できるようになり、2006年には、学院内にも多くのAEDが設置されました。そんなとき、全校駆け足の授業中にある先生が倒れたと連絡が入りました。呼吸と脈が止まった状態でした。その場に居合わせた教員がすぐに心肺蘇生法を開始し、私は急いでAEDを取りに行き使用しました。AEDを用いてその先生の意識が戻った時には、本当に良かったと思うと同時に、誰もがAEDの設置場所を知っており、心肺蘇生法が行えることの大切さを身にしみて感じました。

AEDが整備された現在でも心停止が起った場合、命が助かり社会復帰できるのは5%程度に過ぎないようです。AEDが普及したとはいえ、まだまだ多くの人にその場所や使用法が認知されていない現状があるように思います。救命医療の現場で働く医師の方は「医療技術の進歩により、助かる命が増えたが、後遺症を残さずにさらに多くの人の命を救う為には、より多くの人が心肺蘇生法を行え、AEDを使用できることが重要である。」と言われていました。救命活動は医療に携わる人だけが行えるのではなく、少しの知識と一歩をふみだす勇気があれば誰もが行うことができます。一人ひとりにできることは小さなことかもしれませんが、多くの人が「救命の心」を持てば、その輪が広がり大切な人の命を守ることができるのかもしれません。

現在関西学院には、30台のAED（上ヶ原19台、神戸三田5台、聖和4台、千刈1台、宝塚1台）が設置されています。普段からAEDが置かれている場所を意識してみてください。いざという時にAEDの場所を知っていて持ってくることも救命活動の一つです。そして、これを読まれた一人でも多くの方がAEDや心肺蘇生法について知り、関心を持ってくださるようになることを願っています。

「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」マタイ25：40

（中学部 養護教諭）